

「莖は山によまず」の真意

——『去来抄』の一考察——

復 本 一 郎

『去来抄』〈同門評〉に次の一節がある。安永四年（一七七五）板本によって掲出してみる。

山路来て何やらゆかし莖草ふれぐさ 芭蕉

湖春いばく曰、莖は山によまず、芭蕉、俳諧に巧なりといへども、歌学なきの過なり。去来曰、山路にすみれを詠よみたる證歌多し、湖春は地下の歌道者なり、いかで斯かくは難じられけん、いとおぼつかなし。

大東急記念文庫蔵去来自筆草稿本『去来抄』との間にも本文の大きな異同はない。

本文中の湖春は、芭蕉の師北村季吟の長男である。慶安四年（一六四八）の生まれであるので、芭蕉より四歳年少ということになる（芭蕉は、正保元年の生まれ）。寛文七年には、芭蕉の実質的デビュー作二十八句が収められている『続山井ぞくやまのい』を編んでいる。

芭蕉句へ山路来ての一句は、『野ざらし紀行』の中に、

大津に至る道、山路をこえて、

山路来て何やらゆかしすみれ草

と見える。貞享二年（一六八五）、芭蕉、四十二歳の折の作品である。貞享二年五月十二日付千那宛書簡にも、同句形で見える。アンソロジーの類たぐいでは、貞享三年（一六八六）刊、其角著『新山家』に収録されているので、この書によって、芭蕉生前、人々の知るところとなつたと思われる。其角の遺稿を集めた文集『類柑子るいこうじ』（宝永四年刊）の巻頭二話目に「ちからくさ」なる文章が見えるが、そこにおいても、其角はへ山路来ての句に言及し、左のごとく記している。

箱根山にて、

山路来て何やらゆかしすみれ艸

同記（筆者注・『荦白集』の「はじめてあづまにいけるみちの記」を指す）に匡房のぬし、はこね山薄紫のつぼすみれとよまれしは、二入みしほといはんれう也とばかり知て侍りしを、すべてこゝもとにある、皆かの色なるはおかし。昔の人は、かう方に

いたらぬくまなかりしか。

○是、其力艸也。深う思ひとるべき事也。

「匡房のぬし」から「いたらぬくまなかりしか」までは、慶安二年（一六四九）刊、木下長嘯子著の歌文集『萃白集』中の「はじめてあづまにいきけるみちの記」より摘記したものである。其角が言わんとするところは、芭蕉句へ山路来てゝが、長嘯子の文章に見えるところの大江匡房の歌、

はこね山うすむらさきのつぼすみれふたしほみしほ
たれかそめけん 匡房

を意識しつつ（「力艸」に）つくられたものである、ということである。匡房の歌は、『堀河百首』『夫木和歌抄』に収められ、広く流布していた。

ちなみに、芭蕉のへ山路来てゝと、匡房のへはこね山〳〵の歌とのかかわりを指摘しているのは、一人其角に止まらず、支考の元祿五年（一六九二）刊、『葛の松原』にも、

山路に葦とつゞけ申されしを、ある人、おぼつかなしと難じけるは、有房卿の（筆者注・匡房の誤記）、はこねやま薄むらさきのつぼすみれ、といへる歌を、不幸にして見ざりけむ人の心こそ、おぼつかなければ、たま〴〵の旅にもあらぬまでに酒のみ、馬上にはねぶり行らむ、いとあさまし。

と記されている。其角の「ちからくさ」なる文章がいつ頃作られたものか定かでないが、支考の『葛の松原』は、芭蕉生前に公刊されたものであり、しかも、明らかに『去来抄』に見える湖春の発言が意識されている。『去来抄』の最終稿は、去来の没年である宝永元年（一七〇四）頃と推定されるが、湖春の「葦は山によまず」との発言が、いつ頃発せられたものかは、明らかでない。が、貞享二年（一六八五）以降、『葛の松原』の成立、刊行年である元祿五年（一六九二）以前であることは確かである。なお、湖春の没年は、元祿十年（一六九七）である。——とすれば、我々は、其角の発言以上に、支考の発言にこそ注目すべきであるかもしれない。

(一)

湖春は、芭蕉句へ山路来て何やらゆかしすみれ草〳〵に対して「葦は山によまず」と批判した。対して、去来は「山路にすみれを詠たる證歌多し」と反駁し、支考や其角は、より具体的に、大江匡房の歌へはこね山うすむらさきのつぼすみれふたしほみしはたれかそめけん〳〵を「證歌」として提示した。こうなると、誰の目にも、明らかに湖春の方が旗色が悪く見える。湖春の勇み足ということがある。

が、はたして、本当に、この勝負、湖春の負けなので

あろうか。湖春が「葦は山によまず」と発言した真意は、どこにあるのであろうか。小稿は、『去来抄』の右の一条を、従来とは別の読み方をすることによって、そのところを明らかにすることを目的とする。結論を先に言ってしまうならば、「別の読み方」とは、〈本意・本情〉論の視点よりの読み直しである。

私見を述べる前に、『去来抄』の右の一条が、従来どのように読まれていたかを、いくつかの注釈書によって確認しておくことにしたい。

木島俊太郎著『評註 去来抄』（大観堂、昭和十八年十二月刊）は「芭蕉は和歌の伝統を踏まへて立つた詩人ではあるが、一面、俳諧自由の立場にあつて、新しい詩の境地を絶えず開拓して行つた人である」と、芭蕉句〈山路来て〉を評価する立場をとるものの、湖春の「葦は山によまず」の言に対しては、

古来の重なる歌集のどこをさがしても山路の葦は見当らないやうである。強ひて言へば、たゞ一つ「堀川百首」に匡房の歌「箱根山うすむらさきのつぼすみれ二しほ三しほ誰かそめけむ」といふのがあるが、ともかく去来の説に反して「山路に葦を詠たる證歌」は決して多くはないのであつて、却つて湖春の「葦は山によまず」の方を肯定せざるを得ないのである。との見解を示している。

南信一著『総釈去来の俳論(下)去来抄』（風間書房、昭和五十年五月刊）は、

すみれは日当りのよい原野や丘上、畑のくろなどに自生する。歌などにも赤人の「春の野に葦摘みにと来しわれそ」の歌の如く、野の葦が多く詠まれているようであり、それは『夫木抄』中のすみれの歌十首余の殆んどが野や庭のすみれであることによっても証することができる。

と、湖春の発言を肯定するかの見解を記している。芭蕉の〈山路来て〉の句に対する評価の言は見られない。

『去来抄』の古注釈書二種の中、まず、石河積翠の、寛政五年（一七九三）成立の『去来抄評』を繙くと、大江匡房のへはこね山〉の歌を示すに止まっている。

文化三年（一八〇六）成立の文里著『去来抄解』は、左のごとき見解を示している。

按、葦ハ能薫花也。和歌及連誹ニ未香ヲ詠作セザルナリ。尤ユカシキ香也。葦ハ多ク紫色成故、床シト詠作例ナリ。是ハ源氏ヨリ出タル事也。翁ノ山路来テ何ヤラ床シト申サレケルハ、香ヲ心ニ持タレタルナリ。是、初ナルベシ。（中略）葦ハ箱根山ニ詠リ。葦ノ名所也。尤歌多シ。湖春知ラザリケルハ不審ト。このように見ると、湖春の「葦は山によまず」に対して、支考の『葛の松原』、其角の「ちからくさ」の

文章をはじめとして、右の積翠の『去来抄評』、文里の『去来抄解』の二つの古注釈書も、匡房のへはこね山の歌を「證歌」として反対の見解を示している。すなわち「董」は「山」においても詠むのだというのである。対して、近代の木島俊太郎著『評註 去来抄』、南信一著『総釈去来の俳論(下)去来抄』は、匡房の歌に目配りしつつも、「董」は「山」において詠まれることは少ないとの見解を示している。

しかし、両見解とも、湖春の「董は山によまず」との発言を表面的にストレートに受け止めている点では共通している。

文里の『去来抄解』は、芭蕉句へ山路来ての解釈にも及んでいるが、一句の解釈としては、芭蕉俳句の古注釈書、寛政五年(一七九三)刊、蚕臥著『芭蕉新巻』における左の解釈が注目される。

続古今 春の野に董摘にとこし我ぞ野をなつかしみ
一夜ねにける 赤人 野をなつかしみは歌聖の雅興
にして、山路の床しみは翁の実興なるべし。磊々
崢嶸たるに、董の細くこまやかに咲こぼれたらんは
いかにも床しかるべし。董は野に多く、山路はまれ
くなれば也。

蚕臥は、近代の研究者と同じく「董は野に多く、山路はまれく」であるとの見解を示し、それゆえに「山路」

の「董」を詠んだ芭蕉句は「磊々崢嶸」(石がごろごろしたけわしいさま)とした「山路」との対照の中に「細くこまやかに咲こぼれた」ところの「董」を詠み得たのだ、と評価しているのである。蚕臥は、越中(富山)の俳人。蚕臥が支考の『葛の松原』、去来の『去来抄』を披見していたか、否かは定かでない。

(二)

芭蕉句、

山路来て何やらゆかし董草すみれぐさ

芭蕉

の季題(季語)は、言うまでもなく「董草」である。そして、右の蚕臥の『芭蕉新巻』が触れているように『万葉集』の赤人の歌以来(蚕臥が記すごとく『続古今和歌集』にも採録されている)、和歌、連歌、俳諧の世界を通して詠み継がれている、いわゆる堅題である。それゆえに、「董草」には、和歌以来のイメージである「本意・本情」が纏わっているのである。そこを、確認してみることにはしたい。

芭蕉と同時代の俳人鬼貫の友人に歌人有賀長伯あるがちようはくがいる。その長伯が元禄九年(一六九六)に『初学和歌式』なる歌学書を出版している。その巻二は、「題に相応不相応之事」である。これが、歌の「題」の「本意・本情」(「題の心」)を、歌題に従って述べたものである。

「葦草」については、左のごとく記されている。

葦菜

へつむことを専によめり。のどかなる春の野にいで、思ふどちつむ心をもいひ、又、ひとりつむよしをもいふ。或は、春雨にぬれつゝつむとも、又は庭のかき穂に咲たるを興ずる心など相応也。又紫は女に比すれば、すみれの色のむらさきなるを女になぞらへて、なつかしきよしをもいひ、ゆかりの色ともよむ。又、すみれつむ野をなつかしみ一夜ねにけりとも云ば、皆女に比する心也。惣じてあれたる所に生るよし多よめり。又はしばふのすみれなどよむは、芝草にまじりて咲物也。さればつばなまじりのつぼすみれともよめり。つぼすみれは、一説にすみれの咲いづるはじめはつぼのかたちに似ればいふとあり。よせの詞へつむへゆかりの色へ花がたみかたみは、すみれをつみて入る籠へむらさきへ一夜ぬるへあれたるやどへ春のかきねへなつかしき、など也。（傍点筆者）

長伯は、翌元祿十年（一六九七）、例歌にウェイトを置いての（本意・本情）の歌学書『濱のまさご』を出版しているの、それを繙いておくことにする。左のごとくに記されている。

葦菜

・すみれは、色のむつまじきよし読り。紫は、女に

比すれば也。

新統古へ紫のねはふよこのゝつぼすみれま袖につま
ん色もむつまじ

くさのゆかり、又ゆかりの色と読も、紫はゆかりの
色といへば也。

七社
百首 へ春の色は紫野なるつぼすみれくさのゆかり
に誰かつむらん

へ凡すみれは山野、あれたる庭に生るよし也。又田
づら、杜のこかげなどにも読り。いづれもつみて興
ずる心によめり。或は・世に住わびて山にすみれをつむ
・思ふどち春のゝにいでゝつむ ・露むすぶをのゝ
すみれ、くれて行春のかたみに摘 ・古さとに立か
へりつむ ・すみれさく野に一夜ぬる ・匂ふ葦

・まがきのゝべのつぼすみれ ・庭にうつす ・袖
に つみいるゝ ・其外・花すみれ・すみれぐさ・又
ひとりすみれ・たへてすみれなどいへるは住といふ
心にかけていふ也。・又読あはせたる景物にはへ月
へ露へ雖へ桜へつばなへあさちへ雨へ芝など也。

・色はへうすむらさきへむらさきへ花むらさき
へゆかりの色

・名所かずくある中にも・へいはたの小野 誰子に読
合せたり
・へむらさき野 色にかけ ・へきた野 つばな、あさち
に よみそへたり ・へふ
しみのゝべ たびねしてつ ・へふる野 春雨により ・へとぶ
むよしよめり

ひ野野寺などにそへてよめり

・へむさし野むらさきのゆかりを詮に読たる名所也。仍すみれの歌も紫のゆかりによせて読り。

(傍点筆者)

長伯には、もう一冊、季題(歌題)の(本意・本情)を探るに欠かせない著作がある。元祿九年(一六九六)刊の類題和歌集『歌林雜木抄』である。同書を繙くと、「葦菜」の歌題の下に四十種の「葦」を詠んだ和歌が列挙されている。そして、その中に「花すみれ」「月もすみれ」、あるいは「ま袖につまん」「行春のかたみ」「古郷に立かへりつむ」等のテーマと並べて「山に葦をつむ」が揭示されているのである。このことは、大いに注目してよいであろう。左のごとくである。

山に葦をつむ 老ぬれば花の都にありわびて山に葦をつまんとぞ思 永縁

「堀百」とは、匡房のへはこね山うすむらさきのつぼすみれふたしほみしほたれかそめけん」の歌が収められていた『堀河百首』を指す。

(三)

私が言わんとしているところは、もはや明らかであろう。「葦」の(本意・本情)の問題である。長伯は「葦」の歌題を掲出するときに『初学和歌式』『濱のまさご』『歌林雜木抄』の三歌学書いずれにおいても「葦」と掲

出せずに、「葦菜」として掲出しているのである。「菜」は「采」「採」と同じで、「とる」の意であるので(諸橋轍次著『大漢和辞典』参照)、「葦菜」は、「すみれつみ」と訓むのであらう。そして、この歌題にこそ、「葦」の(本意・本情)が集約されているのである。

すなわち、長伯は、「葦」の(本意・本情)を、『初学和歌式』においては、「つむことを専によめり」と記していた。「葦」は、咲いているのをただ愛で、眺める花ではなく、摘んで(菜んで)楽しむ花だったのである。—— そのように詠むことが要請されていた花だったのである。「つむことをよめり」ではなく、「つむことを専によめり」と記されていることに注意しなければなるまい。そのことは、『濱のまさご』の記述にも窺えるのである。「いづれもつみて興ずる心をよめり」と記されているのである。「山野」「あれたる庭」「田づら」「杜のこかげ」などの「葦」が詠歌の対象とされるが、「いづれもつみて興ずる心」が詠まれるというのである。咲いている「葦」そのものに関心が向けられることはないのである。いや、関心に向けてはいけなないのである。「山」の「葦」を詠む場合にも「山にすみれをつむ」ことを詠まなくてははいけないのである。

それゆえに、類題和歌集である『歌林雜木抄』も、山に葦をつむ 老ぬれば花の都にありわびて山に葦

をつまんとぞ思

永縁

のかたちで例歌（証歌）を掲出しているのである。「山に葦をつむ」は、歌題として定着していたということなのである。

ところで、支考、あるいは其角以来、近代の研究者に至るまで、多くの人々に注目されていた、永縁の右の「老ぬれば」の歌と同じく『堀河百首』に収められているもう一つの「山」の「葦」を詠んだ歌、

はこね山うすむらさきのつぼすみれふたしほみしほ

たれかそめけん

匡房

は、「山に葦をつむ」との歌題とのかかわりにおいて、どのような位置を占めていたのであろうか。歌の表面に「つむ」なる措辞が見えないので、大いに気になるところである。

『堀河百首』の古注釈書の一つに歌学に造詣の深い俳人松永貞徳の著わした『堀河百首肝要抄』（『堀河両度百首之抄』）がある。貞享元年（一六八四）に板本化され、広く流布していた。そこに匡房の「はこね山」の注として、

葦菜の題とりては、かやうの本歌をしらねばよみがたき物也。

と記されているのである。匡房の「はこね山」の歌も、また「葦菜」の歌として理解されていたことを窺知し得

るのである。「うすむらさき」に「そめ（染め）」るのは、摘んだ（菜んだ）後の手作業と見るのである。

ちなみに、連歌の寄合（付合）書である『連珠合璧集』には、

葦トアラバ、つぼすみれとも、すみれ草とも。

紫 摘 あれたる宿 小野くしばふ 春の形見 野
をなつかしみ 一夜

と記されている。寄合語の因つて来たところは、長伯の三歌学書によって明らかであらう。

(四)

『去来抄』にもどることにする。もはや、湖春の「葦は山によまず」の真意は、明らかであらう。匡房の歌、永縁の歌が明かしているように「葦」は「山」においても詠まれる。が、決して芭蕉句「山路来て何やらゆかし葦草」のようなかたちでは詠まれないのである。「山」の「葦」も「山に葦をつむ」との「本意・本情」のもとに詠まれるのである。「葦」の「本意・本情」は、「つむ」ことを専によめり」だったからである。

去来は「山路にすみれを詠たる證歌多し、湖春は地下の歌道者なり、いかで斯は難じられけん、いとおぼつかなし」と反駁しているが、見当違いもはなはだしと言わざるを得ないのである。歌学者である湖春は、「山路

にすみれを詠たる證歌」があることなど百も承知していたのである。ただ、「山路」の「葦」を詠む場合にも、それは、あくまでも「山に葦をつむ」との（本意・本情）のもとに詠まなければならない、ということなのである。「葦は山によまず」とは、そのような意味なのである。あえて、この湖春の言葉をお話するならば「葦は山に咲いているままの姿は詠まない（その葦を摘むことを詠むものだ）」ということになる。先の支考の『葛の松原』における湖春へのクレームも、この点では同断である。駄目押しをしておくならば、湖春の父季吟の著わした俳諧歳時記『山之井』（正保四年刊）の「葦」の項の下には「つぼすみれ つむ」と記されているのである。季吟、湖春父子は、湖春自らが自負しているように歌学には、きわめて造詣が深かったのである。

それでは、芭蕉句へ山路来て何やらゆかし葦草あやぐさに対する湖春の批判「葦は山によまず、芭蕉、俳諧に巧なりといへども、歌学なきの過なり」は、全体として首肯されていいかという、そうはいかないのである。芭蕉に對する「歌学なきの過」との批言は、どう弁護してみても湖春の勇み足以外のなものでもないのである。談林の俳人在色ざいしきから、その著『俳諧解説抄』（享保三年成立）において、「云所大かた連歌の腰折也」と評される芭蕉であつたところからも、その一端が窺知し得るごとく、

芭蕉の俳句作品は、和歌的、連歌的色彩が濃厚なのである。しかも、芭蕉が形象化せんと試みた「さび」は、和歌以来の伝統美である。芭蕉は、人一倍「歌学」に関心を持っていた俳人だったのである。

芭蕉の門弟土芳の『三冊子』に、

花に鳴く鶯も、餅に糞する椽の先、とまだ正月もおかしきこの頃を見とめ、又、水に住む蛙も、古池に飛込む水の音、といひはなして、草にあれたる中より蛙のはいる響に俳諧をきゝ付たり。見るに有、聞に有。作者感るや句と成る所は、即俳諧の誠也。

との一節があることは、よく知られている。この一節で話題になっているのは、芭蕉の、

鶯や餅に糞する縁のさき

古池や蛙飛こむ水のをと

の二句である。それぞれの季題（季語——芭蕉自身は、『笈の小文』の中で「季ことば」なる用語を用いている）は、「鶯」と「蛙」である。「鶯」と「蛙」は、言うまでもなく、『古今和歌集』の貫之の仮名序で、

花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。

と記されているところの歌題であり、俳諧においては、「堅題」ということになる。右の貫之の序の文言の影響下、長伯は、『初学和歌式』において、「鶯」の（本意・

本情」を「いくたびも鳴音のどかなる心相応也」と記し、「蛙」の「本意・本情」を「夕ぐれなど声あはれに鳴よしをいひ、又さびしき心をよむも相応也」と記している。要するに「花に鳴く鶯」「水に住む蛙の声」が注目されたのである。視点を変えて言うならば、それ以外の「鶯」や「蛙」は、詠まれなかったのである。詠んではいけなかったのである。そして、そのことは、芭蕉も十二分に承知していたのである。承知しながらも、あえて「鶯」や「蛙」の「本意・本情」に挑戦してみたのである。そして、従来の歌群とはまったく別種の先のごとき二句を生み出したのである。そのことを可能にしたのが、土芳が明らかにしていたように「見るに有、聞に有」という作句方法である。すなわち対象と対峙し、「見る」ことによって「聞く」ことによって、和歌以来の「本意・本情」を超越し得るというのである。

土芳の『三冊子』には、左の一節も見える。

師のいはく、乾坤の変は風雅のたね也、といへり、しづか成る物は不変のすがた也、動る物は一変なり、時として留さればとどまらず、止るといふは見とめ、聞とむる也、飛花落葉の散りみだるゝも、その中に見て見とめ、聞とめざれば、おさまると、その活きたる物消て跡なし。

従来、この一節における芭蕉（「師」）の言葉は「乾

坤の変は風雅のたね也」の部分のみと考えられていたが、この部分は芭蕉の伝聞であり、「乾坤の変は」からはじまって、「消て跡なし」まで全体を芭蕉の言葉と解したほうがよいように思われる。とすると、芭蕉自身によって作句の要諦が語られている一節ということになる。その要諦とは、土芳が「見るに有、聞に有。作者感るや句と成る所は、即俳諧の誠也」と記していたところと一致する。芭蕉は、対象を「見とめ、聞とむる」ことの大切さを力説している。見て、聞いて、感じる（感動すること）である。

再度、土芳の『三冊子』を繙くならば、左の一節にも行き当る。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞ありしも、私意をはなれよといふ事也。此習へといふ所を己がまゝにとりて、終に習はざるなり。習へといふは、物に入てその微の顕れて情感るや、句と成る所也。

この一節も、先の『三冊子』の土芳の言、芭蕉の言と脈絡を有するものであることは、一読、明らかであろう。「松」や「竹」は、詠まんとする対象である。先の芭蕉句で言うならば、「鶯」であり「蛙」であり、小稿で問題としている「菫」である。「私意」は時に「本意・本情」と重なる場合もあるのである。「本意・本情」は、

「豎題」に纏わる和歌以来の美的イメージであるので季題（季ことば）を詩語として躍動させる役割を負っているが（そのことは、俳句作品を中にして、作者の発信、読者の受信を容易ならしめる）、時に、作者は、その季題の「本意・本情」にがんじがらめになってしまい、新しい発想ができなくなってしまうことになるのである。「本意・本情」は、俳人（作者）たちにとって諸刃の刃なのである。そして、芭蕉は、その「本意・本情」のプラス・マイナス両面を知悉していたのである。決して「本意・本情」を否定することはしなかった。が、時に「本意・本情」に挑戦し、それによって作品に「新しみ」を獲得すべく試みたのである。

小稿で問題にしている「山路来て何やらゆかし葦草」も、「鶯」や「古池や」と同じく、そんな一句だったのである。

ここでもう一度、支考の『葛の松原』の一節を想起していただきたい。

たま／＼の旅にもあらぬまでに酒のみ、馬上にはねぶり行らむ、いとあさまし。

湖春が「葦は山によまず」と発言したことに対して、匡房の「へはこね山」の歌があるのではないかとの指摘（この指摘が見当はずれのものであることは、小稿で縷説した）をし、それに続けての文言であり、湖春を揶揄

したものである。が、この部分に関する限り、正鵠を射たものとなっているのである。湖春に対しての、旅をしても、酒を飲み、馬上で眠てしまうので「山路」の「葦」が見えないのだ、との批言であるが、歌学者でもある俳人湖春は、確かに「本意・本情」（歌学に即して言えば「題の心」）を大切にするあまり、対象と対峙する姿勢を欠いていたのである。対する芭蕉は、右に見てきたように、しっかりと対象と対峙し、「見とめ、聞と」めたのである。

結論を述べよう。湖春の言「葦は山によまず、芭蕉、俳諧に巧なりといへども、歌学なきの過なり」において、「葦は山によまず」は、湖春の言が正しい。なぜならば、すでに見たように「山」に咲いている「葦」が詠まれることは、和歌の世界ではなかったことだからである。和歌で詠まれたのは「山にすみれをつむ」作品であったのである。ところが「芭蕉、俳諧に巧なりといへども、歌学なきの過なり」の部分は、湖春の芭蕉に対する理解不足の結果が招いた明らかな誤り。芭蕉は、決して「歌学なき」人ではなかったのである。「山」において「葦」を詠む時には、「山にすみれをつむ」ことを「本意・本情」として詠むべきであることは（すなわち「葦は山によまず」ということは）、十分に承知していたのである。そして、その「本意・本情」にあえて挑戦したのが、

山路来て何やらゆかし葦草よもぎ

の一句だったのである。「山」に咲いている「葦」を詠んで「新しみ」を獲得せんと意図したものであったのである。

最後に、少しくこの一句に注目してみる。一句の眼目は、「ゆかし」の措辞であらう。

芭蕉の俳句作品の中に「ゆかし」を用いたサンプルを二例見出すことができる。

御子良子の一もと床し梅の花

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

二例とも『笈の小文』中の作品である。〈御子良子の〉の一句では、「一もと」の「梅の花」が「床し」と把握され（実際には「一もと」であるがゆえに「床し」ということである）、〈春の夜や〉の句では、「籠り人」が「ゆかし」と把握されている。二例とも「ゆかし」は「心が引かれるさま。慕わしい」（小学館『古語大辞典』）の意の「ゆかし」であらう。

そして〈山路来て〉の一句の「ゆかし」もこの意であらう。ところが、〈山路来て〉の一句の「ゆかし」は、右の二例と異なり、「ゆかし」の対象が明示されていないのである。句の構造として「山路来て何やらゆかし」で切れるからである。「何やらゆかし」という実に不思議な措辞であるが、これが偽わらざる芭蕉の実感であっ

たのであらう。

そこで注目されるのが、文里の『去来抄解』における解釈である。再度、引用してみる。

按、葦ハ能薫花也。和歌及連誹ニ未香ヲ詠作セザルナリ。尤ユカシキ香也。葦ハ多ク紫色成故。床シト詠作例ナリ。是ハ源氏ヨリ出タル事也。翁ノ山路来テ何ヤラ床シト申サレケルハ、香ヲ心ニ持タレタルナリ。是、初ナルベシ。何ヤラノ詞寂味ヲ尽シタリ。

「葦」は「つむことを専によめり」を、その〈本意・本情〉とした。と同時に文里も言及しているように「色のむつまじきよし読り」との〈本意・本情〉をも有していた。匡房のへはこね山うすむらさきのつぼすみれふたしほみしはたれかそめけんも、「色」に注目しての歌である。ところが芭蕉句は、「山路来て何やらゆかし」で切れるわけであるから、「ゆかし」の対象は定かでない。が、「何やらゆかし」なのである。—— ということは、文里が言うように、背後に「葦」の「香」の存在を暗示しているのであらう。どこからか「何やらゆかし」い「香」が薫ってきたので、注意して見ると、あった、あった小さな「葦」が咲いていた、というのが一句の意味ではなからうか。文里は「葦」の「香」を詠んだ和歌、連歌、俳諧は、これまでにないと言っている。なるほど、長伯の『歌林雑木抄』四十首の中にはない。『堀川百首』

の、

おもふどちならびのをかのつぼすみれうらやましく
てにほふはななか

河内

の「にほふ」は、いかがであらうか。「にほふ」には
「薫る」のほかに、「色が美しく染まる。照りはえる」
の意もあるので、にわかには断定はできない。

いずれにしても、芭蕉の〈山路来て〉の一句は、「山」
に咲いている「菫」を摘まずにそのまま詠んでいること
と、「香」を詠んでいることとの二点によって「新しみ」
を獲得し得ている作品であったのである。なお、文里の
ごとく一句に「香」を指摘したものは、古注釈書中にも、
近代の注釈書の中にも見当たらない。

(平成八年(一九九六)十二月五日了)